

森山邸という場所について

リトルメディア 中村光恵

「森山邸」のことについての備忘録。

私はいま「森山邸」の住人です。

2005 年末に竣工した当初からずっと、この場所に住み続けています。

住み続けて 15 年。

15 年の間にさまざまな人の入れ替わりがあり、小さかった木は大きく成長し、最近は建物の補修も増えてきました。

ここに住むことになったのはほんとうに偶然。

でも 15 年間住み続け、森山さんと共に誰よりもこの場所を見続けてきました。

「森山邸」のことを記録しておくために、15 年の時間を思い出し、ここに記しておきます。

2002 年

森山さんが、建築家の西沢立衛さんに建築の設計を依頼しました。

以前の「森山邸」の敷地には酒屋の店舗（兼母屋）と倉庫と庭と駐車場があり、お店の奥がご家族の住まい。

ご両親は酒屋を営んでおり、森山さんもその仕事に携わっていました。

そして仕事以外の時間は趣味のさまざまな本や映画、ビデオ、レコードを楽しみ、たくさんの物に囲まれて生活していました。

森山さんの部屋はその物たちが常に山積みだったので、部屋の雨戸はほぼ開くことがなく、いつも真っ暗。

ある時、森山家は酒屋をたたみ、この敷地の建物を建て替えることにしました。

建築も大好きだった森山さん。

犬の散歩道で建築家が建てたであろう建物を目にし、建築家に頼むことを思いつきました。

そしてそれからの 1 年間、建築関係の書籍を見まくり（それ以外の本は見なかったそうです）

いきついたのが、その頃まだ 30 代だった西沢立衛さん。

当時、西沢立衛さんは 36 歳。独立して 5 年。

手がけた建築作品は「ウィークエンドハウス」（1998）と「鎌倉の家」（2001）。

森山さんはこのふたつの作品を書籍で見て、「この人に設計を頼もう」と単身事務所を訪れました。

それが 2002 年 6 月のことです。

少し話がそれますが、「森山邸」の計画前から、

森山さんのお母さんは愛犬でポメラニアン犬の「慎之介」（お母さんは巨人ファン）を飼っていました。

でも、お母さんは「森山邸」の完成を見ることなく亡くなってしまいます。

なのでその後「慎之介」は森山さんが面倒をみることに。

「慎之介」は抱っこしていないと鳴いて近所迷惑になるので、森山さんはいつも右腕に「慎之介」を抱いていました。

「森山邸」ができてからも。

「慎之介」を抱いていないと、なんだか不自然に見えるくらいでした。

森山さんと一体化していた「慎之介」は、2016 年 6 月 26 日に 16 歳と 3 ヶ月でさよならしました。

今って葬儀車があるのですね。車に乗せられ戻って来た時には、「慎之介」は小さなお骨になっていました。

その時の葬儀車の男の子がとても丁寧に茶毘に伏してくれて、

森山さんも私も救われました。夜の出来事でした。

「慎之介」は今、森山さんの棟に囲まれた庭で眠っています。

森山邸の設計が始まり、森山さんは打ち合わせのために当時天王洲にあった西沢さんの事務所に通っていました。

その時渡る運河の風景は森山さんにとって「別世界」へ行くような、

忘れられない光景だったそうです。

設計に2年、その後2004年の7月に工事が着工しました。

工事の間、森山さんは「慎之介」と共に隣のアパートに引っ越していました。

毎日「慎之介」を右腕に抱いて工事現場を見ながら、でき上がっていく様子を楽しんでいました。

2005年末、「森山邸」完成

私が建築雑誌の編集者として「森山邸」へ取材に行ったのは2005年の秋頃。

当時の編集長とまだ作業まっただ中のこの場所にきました。現場では鉄板を溶接し、床と一部の壁ができています。

取材の時、建築についてのいろいろな話を聞くと同時に、西沢さんに「住みませんか？」と言われた言葉が心に残り、午前中の「森山邸」の取材のあと、午後は当時のISSHO（藤村龍至さんほかのメンバー）が設計した新小岩の集合住宅の取材へ行き、その新小岩からの帰りにふと「森山邸」に1年ほど実験的に住んでみるのもよいかという気持ちになりました。

その時担当者だった西沢事務所の高橋一平くんに連絡をし、2005年の年末に引っ越しをしてから結局15年。

この場所に住み続けています。

あとで聞いてみると、森山さんは不動産屋さんを通さず、設計者の西沢さんに居住者も集めてほしいとお願いしていたそうです。

よって、住み始めた当初の住人は私のほかはほぼ西沢事務所やSANAAで働くスタッフ。

今となってはその時の森山さんの気持ちがわかります。

できるだけこの場所を理解し、感覚を共有してくれる人に住んでもらいたかったのではないかと。

いちばんはじめに「住む人」の重要性がわかっていたのか、それとも単なる人見知りか。

ちなみに私は、入居してから3年くらい森山さんとはほとんど会話しませんでした。

感覚を共有できなかった一人。

それから15年で、「森山邸」には建築関係以外の仕事をしているさまざまな人が住み、単身者もいれば若い夫婦の住まいにもなっています。

一人暮らしをしていた男性が結婚をして別な棟に移り住んだり、敷地内移動もちょこちょこ起きているのが最近。

オーナーの森山さんが同じ敷地に住んでおり、不在宅急便の受け取りはみんなが森山さんに甘えています。

森山邸という場所について

「森山邸」をかたちづくる各棟は、すべての階のすべての壁面に開口部があり、多くの壁面は壁より開口部の方が大きくなっています。

そのため、訪れる人にいちばんに言われるのが、

「プライベートがないけれど大丈夫？」

「すごくよい環境だけど、自分はここには住めない」

といった言葉。

見学に来て、「森山邸」を語る多くの人たちの言葉に「生活するのはちょっと無理」そんな内心がにじみます。

開口部が大きいことでいちばん大変なことと言えば、より外に近い環境になる住空間であること。

暑さ寒さはもちろん、光が強い。紫外線が強い。

そこにあるものが、建築と共に徐々に白く淡い世界に近づいていきます。

でも、この開口部と壁の関係性、さまざまな住戸の高さの関係性。

住んでみてわかることですが、これによって何が獲得されているのか。

暮らしの中で感じていたいほのかな「人の気配」

見えるか、見えないか、わかるようなわからないような、のぎりぎりの感じ。

これだけ開口部が大きいのに、直接的な視線は交わることがないことに気づきます。

一覗き込んだり意図的に見ようとすれば見えてしまうけれどー
壁が薄いついてだけで、壁でさえも閉じていない、ただそこにある存在感だけ私たちに伝えていきます。
普通に生活している中で目に入るのはちらちら動く人影や洗濯物、そして少しの音や光。
そこから人の気配を感じ、そしてなんとなく人が居る安心感に包まれます。

私ที่บ้านに帰って来て最初に目に入るのは、キッチンのカーテン越しに見えるチカチカした光。
「あー、森山さん、今日も離れでテレビ見ているな」とか。

もうひとつ気づいたこと。
住宅街の夜は明るい。
灯りの明るさもあるけれど、月明かりって明るい。
夜のほんのり明るい暗闇の心地よさはこの場所だからこそその環境です。

こうした生活環境は自分の身体感覚を変えてしまいました。建築恐るべし。
「森山邸」に住んで8年目くらいの時、一度引っ越しを検討し、とあるマンションの下見に行きました。
部屋の扉を開けた瞬間、周りの環境を何も感じ取れない超プライベートな空間が。
その瞬間、「あ、だめだ」
建築の力ってこういうことなんだと感じた瞬間でした。
人がどう生活するか、どんな環境に身を置くか、そのことで身体感覚すら変わってしまう。
変えることができる。

「気配」が介在する全体がつくられた森山邸の環境は、私にとってそこで生息していきたい、そんな環境です。

「森山邸」という場所が生まれたのは、オーナーの森山さんが建築や文学や音楽、映画といった
さまざまな分野への興味が深く、その趣味に向き合う日々を送ってきた時間の結実です。

森山さんはほとんどこの敷地から出ません。
出かけるのは年に数回。行くのはほとんどお友達が経営するお店がある西荻窪。
そのほかの時間は読書をしたり、映画を見たり、音楽を聞いたり、
自分の棟のしつらえを変えたり。
森山さんの家に行くと、日々さまざまな場所のしつらえが変わっています。
小さな小物たちがなんだかとっても魅力的に見える。
自分が建築家につくってもらった場所を、心から楽しんでいると感じます。

それがこの「森山邸」にある本質です。

最近森山さんは、肉体労働を伴った楽しみ（苦行？）も覚えたいみたいです。
15年経過した「森山邸」の修復を、できるところは森山さんがやっています。
特に窓周りや外壁の補修。
すでに職人さんなみの腕前です。

15年目のこれから、少しずつこの場所のことを開いていけたらと思います。
それがいつまで続くのかはわからないけれど、

ここにあるものの本質を知ってもらいたい。そしてこの場所の時間を記録していきたい。
その思いで始めます。